

起源伝承から「棍棒を携えた闘い」まで

★ウガンタ・パドラにおける歴史と記憶

……………梅屋 潔……………

1 はじめに

本稿は、ウガンタ東部トロロ・ディストリクト (Tororo District)、旧ブケディ (Bukedi District) に属する西ブダマ・カウンティ (West Budama County) に主に居住する、ナイル系の集団シヨパドラ (Jopadhola) についての民族誌的基礎研究の一部である¹⁾。この地域はパドラ・カウンティ (Padhola County) とも呼ばれる。シヨパドラの移動と居住及びその政治と紛争についての叙述を、クラッツォラ神父とオボスロフンビの報告を中心に行い、それに半ば平行した形で二〇世紀初頭まで影響力をふるい、間接的には少なくとも一九六〇年代までは無視すべからざる存在となったカリスマ、マジャンガ (Majanga) について報告する。その作業を通じて、パドラに住む「民族」がそのアイデンティティを構成する過程が記述され、さまざまに彩なす歴史過程の分析が呈示される²⁾。

3 起源伝承と居住地区の確立

ついにマジヤンガの登場まで約九世代の歴史的な流れをクラッツォラ神父とオボス・オフンビの記述に沿って述べる。起源伝承によれば [Crazzolara 1951: 315-323, Oboth-Ofumbi 1960] ショバトラはみな創設者アドラの子孫であるという。ランゴ・オミル (Lango-Ominu) の圧迫に よって彼とその兄弟のひとりオウイニーらは、仲間を引き連れて南に移動し、現在のテソ (Teso) に移り住んだ (兄弟とすることもバトラ語でもとも英語の brother に近いオミナン *omin'an* の範囲は広く、B' B'WB' MBS' ZHZH' MZS を含む)。暫くして過剰していたが、水が不足しているため土地に不満を抱き、ブグウェレ (Bugwere) を訪れた。その旅の途中で彼はニャジュリヤ (Nyajuria) と結婚した。三月にニャジュリヤは調子が悪くなり、人々は何日かウィクスイ (Wikusi) の丘で休息を余儀なくされた。その後、カタンディ (Katandi) を横断したが、もう歩くことはできなかった。ムブレ (Mvule: ガンタ語) の樹の下に座り込んだニャジュリヤは溜息をつき、*"A al nyuth ma ii yan onyo pekapeka papoolo: A ki nyel kendo woth"* (お腹が空のように重くてもう歩けないわ) と言ったという。そこでアドラとそれに従うものたちはカタンディに棲むことになり、オウイニーは別の集団を率いてケニア西部に住み着き現在のケニア・ルオの創設者となった [Crazzolara 1951]。二つの集団が分かれたきっかけには諸説ある。単に喧嘩したためであるとか、アドラの姉妹 (これも一夫多妻であることも手伝って範囲が広い) がオウイニーのビールを飲んでしまった賠償をしなかったために齟齬が生じたとか、槍を紛失して仲違いをしたとか、オウイニーはやや冒険好きな性格で先に行くから後から追ってきてほしいと言ったとか、あるいはアドラの名称の由来となった傷が彼の機動力を奪い、南下を断念させた、などの諸説である [Oboth-Ofumbi 1960]。いずれにせよ、彼らが相まみえることは二度と

無かったのである [Ogot 1967a: 76]。

やがてニャジュリヤは男の子を産み、ニャポーロ (Nyapoolo) と名付けた (ポーロ Poolo は天空を意味するといふ)。これが後世権勢をふるうニャポーロ・ラン・クランの権威付けとなっている。その後アドラは、ニャジュリヤの姉妹のひとりオリヤン (Oryan) と結婚し、ニャジュリヤとの間に一五人、オリヤンとの間に一六人の息子たちをもうけた。それが今日ある二一のクランのもととなつてゐると言われている [Odoi-Tanga 1992: 18, Ogola-Yokana 1993: 18, Crazzolara 1951: 315-6, Ogot n.d. Vol. I] が、サウザールはその調査でそれに類した伝承を得ることがなかったと云ふ [Southall 1957: 2]。実際は数多くの外来者を取り込んでいる形跡があり、別の報告では外来者を除くと二〇であるといふ [Oboth-Ofumbi 1960]。更にオロットの調査では三五確認したクランのうちわずかに一八がルオ起源であり、残り近隣諸民族の複合であったことがわかっている [Ogot 1967a: 22]。一九九四年に創設されたアドラ・ユニオンの公式見解によると、今日では五二のクランがあると言われている [New Vision 1998a, Tieng Adhola (Uion) n.d.]。

4 支配者列伝——紛争の記憶

最初の指導者 (現地語ルウォース *Rwooth*) であるンコーリの時代には、東のヨ・ウォロヨ Woko 地域ではセウエ (Sewe) 人からの牛略奪 (raiding) とイテン (Teso) からの攻撃をしばしば受けた。バドラ語 (バドラ *Dhapatdola*) ではセウエという言葉自体は蛆虫を指し、蛆虫のように地へたで眠ることを暗示する。また、大勢で来て牛をさらったり殺しを行う猛猛なひとひとと云う意味でも記憶されている [Ogola-Yokana 1993: 19]。セウエはマアサイ (Maasai) に対するイテンの呼称イスマーベ (*Isybe*)、ンニョム (Banyole) の呼称ンセン (Besebe) に対応していると見られ、ワスイ・グシム・マアサイ (Uasin-Gishu Maasai) による説とともバセンイ (Sebei) やナンディ (Nandi) とする見方もある [Ogot 1967a: 93-4, Texts n.d. Vol. I: 7-8, Southall 1957: 3]。しかしバセンイは懷疑的である [Packard 1970]。伝

承によれば「ある夜、(セウエと隣接していたジョバドラ)ラモギ(Ramogi)らはセウエの襲撃を受けて驚愕した。矢、槍、棍棒を持ったセウエが攻めてきて逃れられたものは少なかった。いまも Sewe oneko yac ma Matindi jipere je (セウエがマティンディ Matindi の家々にいる少年を皆殺しにした)という歌で記憶されている悲劇的エピソードがある(当時のリーターのクラン)。ランガ (Ranga) 軍は、報復を試みたが惨敗し、いまは東の国境となっているマバまで撤退した」[Crazzolara 1951: 316-7]。

エルゴン山からのミソソワ (Misoowa) との激しい戦闘が起こったのもゴゴリがルウォースだった時である(ミソソワはバギスのジョバドラ側からの呼称)。彼らは、酷く打ち負かされ、エルゴンに敗走したと伝えられているが、寧ろジョバドラが北東山岳地帯に遠征して略奪のためにミソソワを攻撃したと考えられている。山岳地帯での戦闘のため、地の利からミソソワが避難に成功を収め、ジョバドラは諦めて土地に戻った。彼らがそこで見たものは、耕作されていない土地、空っぽの穀物倉だった。結果としての食糧難は彼らに決定的な影響を与えた。侵攻できない近隣集団に対して平和を保つことの必要性を感じた彼らは、代理人を立てて和平の話し合いができるように手配し、メリキット (Merikit) で平和的に話し合い、それ以来ジョバドラとミソソワは友好関係を保った [Crazzolara 1951: 317-8]。この土地の名は食べ物や包み真ん中にあるという意味を持っている。

食糧難を切り抜けたので人々は喜び、指導者ゴゴリに感謝するとともに、その指示のもとに神格ウエ (Wera) に対する感謝の宴を何日にもわたって開催した。ドラムが打ちならされ全土から人が集まってきて食糧とロンゴ (Kongo) ミレット・ビール。テソ語ではアジョンといひ、ミレットを発酵させたものにお湯を注ぎ植物の繊維でできたチューブで飲む [長島 1972] を捧げた。ゴゴリは去勢牛を何頭かつぶし、ニヤジュリヤの樹の下に腰掛けていた。ここでアキスイリ (Aksiri) の踊りが初めて行われた。ゴゴリと同世代の男たちが模擬戦を行い、集団のために戦い命を投げ出す覚悟を示した。続いて若者が年長者たちのすることを真似た。決められた日に、ゴゴリと年長者たちは大勢の人々を連れてブラ (Bura) の祭祀装置の所へゆき、牛、山羊、コンゴを捧げた。カタンディでの祭祀が終わると、人々は家路について

た [Crazzolara 1951: 318]。その土地土地で、宴会が催されその間はゴゴリと同じ年代の男たちとその妻たちがすべて労働を免除された。その間の仕事は使用人 (ジャゴジャゴ) によって行われた。この宴会の記憶は薄れることがなかった [Crazzolara 1950: 319]。ジョバドラとオモア (Omua) と呼ばれたバニョ (Banyole) との関係は、次第に雲行きが怪しくなってきた。一人のパドラが視力を失い、何人かが殺害されたが、オモアは平和的に解決しようとはしなかった。結局ゴゴリは開戦を宣言し、いざこざやときに敵対行動はあったが、決定的な衝突はなかった。そのうちにゴゴリは死に、息子のリサが後継した。彼は *Owiri go ma beedo i pyen ma keer pa baa mere* (父の聖なる毛皮の上に座るべく任命されたもの) と言われたが、争いの收拾をみることなくカタンディで死んだ。続いて後を継いだピヤンの時代に、オモアは、武力による居住域の確保が失敗したので、妥協して平和を再建したいと申し出てきた。ピヤンらはそれを認めたので平和が再び戻り、ピヤンは *gimulojo Ngoor loyo odhyero kir Risa* (ゴゴリの手に余るものはリサの手にも余る) と職えられた。ピヤンの死後は、マコロ Magoro が後継した。"Jopadhola to yowiro Magoro I pyen ma keer, to jomiyogo tong gi kwot ma keer" (ジョバドラはマコロを聖なる毛皮の上に座る者として任命し、聖なる槍と楯を与えた) と言われた。この治世では、オモアとの関係も良好で、相互理解の証として贈り物を交換していた。このころミソソワの方角から新たにオミニア *Omia* (イテン) の人々が来て居住を許され、東の側に住んだ。彼らはマゴロをルウォースと見なし、慣習的な仕事を行い、規定された贈り物をした (*Ukelo ngo michi: giving gifts*)。マゴロの死後、息子ゴゴリ二世が後を襲ったが、この時代オミニアは反抗的な態度を取り始めた。牛を盗み、ルウォースのための労働と贈与の義務を怠るようになった。ついには自分の国がほしいと訴えるようになり略奪を続け、パドラのホームステッドを焼き払った [Crazzolara 1951: 319-20]。敵がそばにいるのを嫌ったゴゴリ二世らは、軍を用いて彼らをマラワ川の向こう、部分的に東の現在のケニアに、また別の集団は南のサミアとオバーラ (Obara) の森の方角に追いやった。これがオミニア・テン (*Omia Ten*) が最後に二つに分かれた事件である。ゴゴリ二世の後息子が後継しリサ二世となった。この時代には、オモアと再び深刻な問題が持ち上がった。彼らはパドラを支配する機会をねらっていたのである。すでにガンダ (Waganda

Magende' 現在はマケレ Mageye とンガーヤ Nganya とよぶひと(いる)と同盟を結んでいた彼らは奇襲に一時的に成功し、パドラを驚かしたが、リサに召集された長老たちの反応は早く、真昼に休んでいる彼らを急襲した。こっそりと彼らを取り囲みウィローコ！ ウィローコ！ ウィドローマ！ Wiroko! Wiroko! [正しくは wirok] Widomai [winuwagol] と叫びながら攻撃を仕掛けた。ンガーヤは敗走し、血路を開いて逃げ延びたものたちはパドラのことをダマ (Dama) と呼んだ。彼らの叫び声がそう聞こえたためである。彼らは再び攻撃を仕掛けてはこなかった。リサは息子を残さずして死んだので、ムブウェーケスイが後を襲った。彼はオグレ・クラン (Ogre clan) に戦争で捕らえられた他「部族」で、リサが乞われて慣習に従い子として育てた若者だった。人望が厚かったので賛成するものもいるにはいたが、多くはジャゴをルウォースにすることを望まなかった。ムブウェーケスイは雨つくりでもあったので一計を案じ、集会を開き、自分を支配者にせねば空を落とすという神託があったと公言した。ある日、彼は雨を「つくり」、濁流となって降りしきる雨の中を、空が落ちてくるから小屋に入っているように説いて回った [Crazzoiara 1951: 320-1]。人々は恐れ、彼をルウォースにすることに對する異議を唱えるものは無くなった。しかし、彼は早くになくなったので永らくその地位を占めることはなかった。もはや後をその息子アクレが継ぐことに既に異論はなかった。

アクレの時代に優れた戦士で策士でもあり尊敬を集めていたバラガン (Pa-Ragan) とパヤ (Paya) のサブチーフ、アホンゴ (Abongo) がオモアの奸計によって惨殺された。彼の妻がオモア出身であり、その家族に招かれたところを謀殺されたのである。アクレは直ちに召集をかけ、遺体を取り戻そうとしたが、アボンゴの義理の父も含めそれを容れないため、戦争状態となった。四日間の戦いで双方数多くの犠牲者を出し、漸く遺体の奪還に成功した。埋葬の後も戦争は続き、実力が伯仲していたため容易に決着がつかなかった。

5 支配者マジヤンガ

この紛争をおさめたのが、英雄でありカリスマであり予言者でありブラの最高祭司であって古今無双の戦士であるマジヤンガである。彼はアクレの乳搾りをしていた若者で、キナラ (Kinara) というひとの子だったが父が老いて貧しかったためにアクレに引き取られ育てられた。実は戦争の時に捕らえられたのをキナラが子としたとも言われている ([Southall 1957: 14])。彼には少し普通ではないところがあった。予言や知るはずのないことを言い当てるのである。狩りに出る前に仲間の一人に「大蛇に襲われるからやめておけ」と言う。もちろん皆信用しなかったが驚いたことに予言が的中した。また別の時には皆で座っているときに女の子が豹に襲われている、と言い出した。彼が言った場所に行ってみるとなるほど少女が死んでいた。更にはアクレの所持する牛がマジヤンガの屋敷に住み込む事態に及んで人々は恐れ、追隨した。アクレは自然軽んじられるようになったが、それに甘んじた。 *Orie oromo thuron pa Akure* (アツレの牛を奪った) と人々は評した。彼はジョク・ブラ (Jok Bra) の加護を受けていたのだろう。ときに彼は何日か姿を消しテウォ (Tawo) と言われる森の中の岩山に設けられた祭祀装置に赴き、コンゴと鶏や動物を供犠してお伺いを立てたと言われる [Oboto-Ofunbi 1960: 8, Part III, Chap. 2, Southall 1957: 14]。彼はオモアとの紛争をきれいに治め、境界付近には息子を含め配下を常駐させた。息子の他は他「民族」からの彼に對する心酔者たちであった [Crazzoiara 1951: 321-2]。彼ははじめてそのカリスマ的な力を背景にクランの範囲を越えた権威を確立することになる。

6 テソの合流

マジヤンガの時代に、ミーマ (Tema) のオグティ (Oguti) というひとが、仲間に入れてほしい、子供にしてほしいと

ベンド (Bendo)・クランに申し出た。一説によると父が邪術師であるという疑いをかけられ、追放されて来たともいう [Southall 1957: 4]。クラン・リーダーのオワロ (Owaro) はそれを認めた。オグティは堅実に戦争の時にはオワロの側に立って戦い、しかも勇猛であった。しばらくして近しい仲間を呼びたい、牛も取り返したい [Southall 1957: 4] という旨の願いをオワロとマジャンガにしたところ認められ、その命を受けてそれらがジョパドラに適應できるよう教育係の役割を果たした。それらは完全にジョパドラとなり、やがてオグティらはトロロのベンド・クランと住みたいと乞うた。元々既にナゴンゲラは人口過多だったのでオワロも快く認め、トロロに移り住んだ。人々は川を越えて入り込み、次第にテソがベンドないしラモギに編入され、ほぼ完全に同化した。かつて彼らが追われたマラワ川から彼らは渡ってきたのである。以後彼らは何の問題も起こさなかった [Crazzolara 1951: 332]。白人が到来したのはそれから数年後のことである。パドラは暫くの間平安を保っており、戦いなどは記憶から遠ざかりつつあったが、何年か後に大きな音を出す兵器を持った新しい「民族」が現れたという噂が立った。彼らはマゲレ (Magere) と呼ばれたが、実際、白人の火器を背景にしたバガンダであった。既に年老いたマジャンガはこうした事態を予想していたので戦いの準備をしていたが、火器とキングズ・アフリカン・ライフルズ (KAR) の前には服従を強いられ、平和が訪れた。マジャンガの覇権は白人の大きな音を立てる武器 (約一〇〇〇の銃) を背景にしたカクングル軍によって終わりを告げ、彼は獄中で一九〇五年にこの世を去ることになる。

ガンダの行政官は自然マジャンガの息子で同名のマジャンガをアドミニストレーターに任命したが、一度敗北したマジャンガとそれを擁するニャポロ・クランの威光はもはや取り戻すことはできず、ブラ・カルトとともに葬り去られることになった。その後はアドミニストレーターが交代する毎に「民族」関係のひずみと闘争の記憶が回顧されることとなる。こうした齟齬は「民族」内部でもフラストレーションを蓄積して行った。その集約された出来事として、マジャンガの死後五五年後の一九六〇年にクラン同士の宗教的対立が絡んだルウェニ・アビロ、つまり「棍棒を携えた闘い」が起こる。さすがのマジャンガも予想してはいなかったらうこの事件と口頭伝承の中に沈殿した記憶との歴史的

連続性について分析する作業はまた今後に残された。本稿はそのための基礎的な確認にすぎない。

7 結語

本稿の背景にある資料の一つを作成したオボス・オフンビはその後一九五八年までの歴史を多かれ少なかれ名門ニャポロ・クランとの絡みで綴っている。彼は一九七一年二月よりアミン政権の国防大臣であったが、後に大司教ジャナニ・ルウム (Janani Luwum)、鉱物水資源大臣エルナヨ・オリエマ (Ernayo Oryema) とともにアミン大統領に殺害されている。殺害された理由はつまびらかでないが、ゲリラと内通していたか [Avigan and Honey 1982]、三人とも広義のルオ出身であることも関係があるものと見られている [Mutibwa 1992: 104-14]。一九六〇年に起きた激しい暴動も、ひいては一九七七年のアミン大統領によるオボス・オフンビの殺害も、さまざまな意味で宗教が絡んでいると言える。彼の容疑はゲリラとの内通であったが共に殺された大司教ともども広義のルオ系の出身であり、そうでなければ仮に冤罪として疑いは無かったかもしれない。事実ゲリラと関係があったとしてもそのネットワークをつくり得たかどうかはわからない [Mutibwa 1992: 112]。オボス・オフンビの件は、アミン大統領の強烈な個性によって複雑な屈折をもって語られているが、一九六〇年の反納税暴動についてはそうではなく、この地域の複雑な権力関係を集約する歴史的事件として記憶されている。その概略と若干の背景のみを記し、結びとしたい。

一九六〇年一月一六日、ウガンダ東部ブニョレ・カウンティに端を発する暴動は瞬く間にブケティ・ティストリクト全域に広がった。一四日には約二〇〇人の人々がパヤ・サブカウンティのチーフを襲い、軽い火災を出していた。一六日の一六時と一七日の一九時一五分にはキレワ Kirewa で数え切れない暴徒が集い、同じ日の二一時には、モロ (Moro) でも戦闘準備をととのえた暴徒が家屋を焼き払った。キレワの北三マイル付近で六〇人ほどの暴徒による火災があったのはそれから約三〇分後である。さらに同日一三時には約五〇〇から六〇〇に及ぶ暴徒がキレワで獄衆の解放

を要求した。続く一八日未明三時から六時三〇分にかけてナゴンゲラ (Nagongera) に極めて膨大な暴徒が集まり、家に火を放った。その後九時までに三〇〇もの人々は行政事務官との面会を要求して居座った。一〇時、キノコ (Kisoko) の北で槍や棍棒で武装した暴徒が家を焼き払い、一一時三〇分にはキノコ・ヘッドクォーターに群がった。

続く一九日午前にもムランダ (Mulanda) で火災が散発し、暴徒が激増するに及んで、一〇時三〇分、遂に警察が実力行使に出た。正午には、イヨルワ (Iyowa) にこの騒動は飛び火し、約二〇〇人の人々が二手に分かれてゴンボロラ・チーフを探し回った。警察は行政事務官を伴って暴徒を解散させ秩序を回復すべくパトロールを行い、暴徒を説得するとともに、ときには警棒、催涙ガスを使用して強制的に暴徒を散らした。やがて、時間は記録されていないが、パヤ・サブカウンティでヘッドクォーターが破壊され、家屋が燃やされる事件があった。出動したワーリングラ警察が暴徒への威嚇目的の発砲を行い二人を負傷させたことで暴徒は攻撃性を増し、警官隊は暴徒に包囲された。警官は発砲し、警棒を駆使して暴徒を鎮圧した。帰路再度暴徒に襲われた警察は躊躇なく発砲した。この計二四回の発砲の結果暴徒一名死亡、四人負傷と報告されている [Government Printer 1960] 目撃者によると、実際の被害者は報告より多く、ペリペリ村のオペンティ・エリーザとソブソブ村のオブル・アワリ二名はその場で死亡し、背中を撃たれた二人が更に病院で死んだほか、重傷が数名いたという [Ogola-Yokana 1993: 130]。続く二〇日には二〇〇から三〇〇人の暴徒がムランダ・ヘッドクォーターへ行列をつくって押し寄せ、一〇時四五分にはマゴラ (Magola) で数多くの人々が武装し暴れまわった。この間政府も指をくわえて傍観していたわけではない。

一八日にブケティは「混乱区域」指定を受け、KARがムバレに派遣された。KARは警察の補助活動を行い、第六二分隊の逮捕活動を援助した。一九日には集会禁止令が出されている。やがて、逮捕活動が始まり、おもな活動参加者を拘留し始めた。このやり方は、妖術師狩りにも比することができるところで [Ogola-Yokana 1993: 135]、自分の家に押し寄せた人間のうち、知った顔を同定し(もちろん殆どが知った顔であるが)寝込みを襲って逮捕するものであった。そうした方法で二二日に終結を見るまでに、カウンティ全体で三六六のホームステッドが被害を受け、被害総額は八万九

九三二ポンドに上った [Government Printer 1960]。一〇〇名が逮捕され、うち一名が死刑、八名が無罪となったほかは六か月から一〇年の懲役刑の判決が出された(六名は出廷拒否のため六シリングから五シリングの罰金)。当地ではルウェニイ・アビロ (Luwenyi abiro) つまり「棍棒を携えた闘い」として有名なこの暴動は、その期間こそ短く、その規模もマジマジやマウマウ、チムレンガといった紛争や運動とは比することができないほどに小さく、その記録も乏しいが、ブケティにおけるウガンダ独立前夜の混乱期を象徴するものとして語り継がれている。

この暴動がいかに人々の記憶に衝撃を与えたかを暗示するように、一九六〇年代に初等学校では次のような歌が教えられていた。

Oro ma gama achiel piero/Apari nibungweni gi piero/Awichelei adachi ma Bugisu/Kodima Bukedi, jo ero/Luwenyi pajo/
Nairagano babagini jokodi/Omini jouwoho gi longel/Nairagano kuwragini/Jokodi baba jouwoho gi luhe/Luwenyi gi hisaka iduwoho/
gi gueno

(その年一〇〇〇と九〇〇と六〇 [六年]/Bugisu の一部と/Bukedi の土地で始めた/彼らの戦を/そのときに/父はでていった/その兄弟たちと槍を持って/そのとき祖父たちは/父と棍棒をもって行った/戦から帰ったときは/鶏を持っていた)

もっともこの歌を創作し広めたのは当時パヤの教師をしていたオウィノ・オウオラであり、彼は前述のパヤにおけるワーリングとの小競り合いで重要な位置を占めていたから、この歌の作成に関しては、当時暴徒側の歴史と記憶の操作の意図も見て取ることができるし、そうした出来事を社会に埋め込み歴史的記憶として維持する装置として一時期機能したと考えることもできる。

暴動それ自体の直接的なきっかけは、前年から噂のあったパニョレの反納税運動である。しかし原因は複雑に絡み合っている。その階級闘争としての側面や植民地支配下における植民地主義および帝国主義との矛盾、綿花栽培の強制、税を含む経済的問題、地方行政政府の問題、教育、宗教など多様な要因を孕んでいると指摘されている [Ogola-Yokana 1993: 54-123]。こうした問題を解きほぐすには、稿を改める必要がある。最後に一つだけ重要なことを指摘して本稿を終え

究は極めて乏しい。日本では松園典子が六〇年代に短期調査をした〔松園1968: 183-88〕。

(2) 本稿は初め「棍棒を携えた闘い」(Luanyi Abiro)——ワガンダ東部ブケアイにおける一九六〇年暴動の展開」として執筆を開始されたが、そのみで予定枚数を大幅に超えることが予想された。併せてフィールドで執筆する不自由等があり、その背景のごく一部が本稿である。続いて現地語表記と言語構造について若干述べる。現在ではアルファベットの普及により、かつてあったと見られる変母音による語彙の弁別は一般的でない〔Crazzolara 1950〕参照)。現在弁別におお用いられるのは *o* および *u* である。本稿では前者は *o* (文末に位置した場合には *u* を省略) としている。いずれ言語に焦点を絞った論考で細部を論じた。

(3) 数少ない基礎文献のうち公刊されているのはクラッシュョアラ神父の手になる民族誌の一部〔Crazzolara 1950〕と自らがショムトラでありバドラ語で出版したオボス・オフンビの民族誌〔Oboth-Ofumbi 1960〕の第一部は部分的に類似している。前者には後者にはない支配者列伝があり、後者は、第一部(歴史)、第二部(代表的な clan の群)の由来)、第三部(供儀・婚姻・誕生・双子・埋葬儀礼と戦争・狩りなど慣習の紹介)よりなっている。後者にはその協力者が記されているが前者には教師たちの協力を得たとのみ記されており、現在のところ資料の出所は不明である。筆者はオボス・オフンビ未亡人宅より、書き込みの入ったサウザール(1957)のタイプスクリプトを発見している。著者の参考にしていただと考えるのが妥当だろう。オボス・オフンビ自身はンガ由来のニョレンジャ・クラン(Nyrenja clan)の出身である。この点グシヤ(Gusii)に属するシャムラン・プロ(Shadrack Malo)がルオの口頭伝承を収集した間の事情と類似している〔Ogot 1967: 24; footnote 19〕も参照)。彼の著作〔Oboth-Ofumbi 1960〕は題名の一部を各種マンソケットを除く唯一の出版物であり、B・A・オットー Ogot によって英語に抄訳され、Padhola Historical Text Part I (Nairobi 大学歴史学部蔵ある)はオットー所有)としてしばしば彼自身に引用されている。オットーはそのうちの第二部「クランの歴史を利用してアウトラインをくくり、当該クランの長老たちに聞かせ、議論させた後に「真性ヴァージョン」を録音」、歴史的テキスト第二部(Padhola Historical Text Vol. II)を作成して基礎資料とする方法を探った。この「真性ヴァージョン」という概念については問題があり、別に議論する必要がある。

(4) 格好のバンテオンは入り組んでおりバンツ系(ウェレとナール系)のグシヤ〔岡部1990〕〔栗本1998〕にシウエレ由来と言われるニャキリガを崇拜するブラ・カルトが覆い被さる形となっている〔Ogot 1967a, b〕〔Packard 1970〕〔Sharman 1969: 173-6〕。これが後のアキシリ儀礼の起源であるといわれる。数年に一度行われていたとどうも模倣戦で、世代交代の意味づけも持つ。A・サウザール〔Southall 1957〕はこれを年齢組織のための通過儀礼と見、A・シャーマン〔Sharman 1969: 152〕は戦士から相残役への役割の変更を目的とする儀礼と見た。多くの死傷者が出るため政府はこれを禁止し、六〇年以上行われてはいない。六〇年代末に準備は行われたものの、不成功に終わっている。一九一五年のムノ Munno 紙によると「これは四〇歳から五五歳までの男たちによって行われる模倣戦で、足には鈴をつけ、頭には角をつけ、棍棒を持って更にはジャマと呼ばれる使用人に瓢箪と椅子を

- 運ばせながら村を練り歩いた二月の後に、マジヤンガの墓の前で笛を吹き鳴らし、木から杖を切り出す。更に三日後笛や太鼓を打ちながらカタンテに集まり、この儀礼を既に切り抜けたものたちだけの組と、未だ経てはいない者たちの組との二組にわかれる。後者には、経験者の随行人が幾人かつき、おのおの妻と子を伴っている。男たちが戦っている間にその妻子らは周りで見守り、傷ついたものに牛糞を塗りたくる。その後 Were kodiwakiriga Bura, uminani mulube [sic] (我がが神マキリガ・ブラ)と、我が命を、我がと我がの子らに平安を)と唱える。マキリガはブラの敬称である。ムノ。なおこの期間中は何人も彼らに労働を強いることはできず、万が一そんなことがあるとマキリガの祟りがある〔Munno 1915: 148-9〕。但しこの文書にはニャキリガをマキリガとするなど、言語上の誤りが多い。報告者は現地語に通じていなかったと推測される。
- (5) ショムトラについてはスーザン・レイノルズ・ホフイターの博士論文と M・A・ホフイターの博士論文がある〔Whyte, S. R. 1973〕〔Whyte, M. A. 1974〕。前者は加筆修正の上最近出版されているが、残念ながら著作が現在手元になく。
- (6) ショムトラ引用はマシヤムラ〔1951〕による。現地では誰も意味を解かなかつた。ミスでなければ他言語からの借用か極端な古語なところ雅語なのかもしれないと想像するが、それは確信を得られなかつた。
- (7) ショムトラの記述から他「民族」との混同が伺われた。
- (8) Okello Yokana 51, Aggrey Ocho58, Peri-Peri Village 24/07/93 [Ogola-Yokana 1993.]
- (9) District Court Registry, Criminal Register no. 339/58, Tororo.
- (10) West Budama County Records File no. IMT 2/k 16/Nov/61/Kosoko County Archives.

参考文献

- 岡部年雄 1990 「力」の概念と世界のイメージ——西ケニア・ルオ族のシエオンをめぐって」『民族文化の世界——儀礼と伝承の民俗誌』上巻、小学館
- Avirgan, T. and Martha Honey 1982 *War in Uganda: The Legacy of Idi Amin*. Dar es Salaam: Tanzania Publishing House Ltd.
- Crazzolara, J. P. 1951 *The Luo*, Part II. Verona.
- Department of History, Makerere University 1971 "Source Material in Uganda History, Vol. III.
- Government Printer 1959 *Uganda Population Census*. Entebbe.
- Government Printer 1960 Report of Commission of Inquiry into the Disturbances in the Eastern Region. Entebbe: Government Printer.

- Gulliver, P. and P. H. Gulliver 1953 *The Central Nilo-Hamites*. London: International African Institute.
- Mutibwa, P. 1992 *Uganda since Independence: A Story of Unfulfilled Hopes*. Kampala: Fountain Publishers LTD.
- 糸園敏子 1968 「民族のたぐひ・文化の差と民族意識の形成」『民族学雑誌』第3巻第4号：183-188
- 味根徳洋 1972 「ルンダ族誌」中央民族
- Obooth-Ojumbi 1960 *Radhola*. Nairobi: Eagle Press.
- Odoi-Tanga, F. 1992 "A History of Cotton Production in Padhola County of Eastern Uganda: 1925-1990." M. A. Diss. Makerere University, Dept. of History.
- Ogola-Yokana 1993 "The Bukedi Riots of 1960 with Special Reference to Padhola: A Study of Peasant Uprising against Colonial Rule." M. A. Diss. Makerere University, Dept. of History.
- Ogot B. A. n.d. *Padhola Historical Text Vol. I, Vol. II*. Nairobi University Department of History.
- 1967a *History of Southern Luo: Vol.I*. Nairobi: East African Publishing House.
- 1967b "Traditional Religion and Precolonial History of Africa: The Example of Padhola." *Uganda Journal*,31(1).
- Okobi F. 1980 "British Administration in Bukedi, 1900-1953." M.A.Diss. Makerere University.
- Ohtieno, T. 1967 "An Economic Study of Peasant Farming in Two Areas in Bukedi District, Uganda." Unpublished M. Sc. Thesis, Makerere University College, Kampala. (Unpublished)
- Packard, R. M. 1970 "The Significance of Neighbourhoods for the Collection of Oral History in Padhola." *Uganda Journal*,34(2).
- Sharman, A. 1969 "Social and Economic Aspects of Nutrition in Padhola, Bukedi District, Uganda." Ph. D. Diss. University of London. (Unpublished).
- Southall, A. 1957 "Padhola: Comparative Social Structure." (Paper presented at Conference at the East African Institute of Social Research, Makerere University College), Mimeo.
- 米根徳洋 1976 「ルンダ族——ルンダ族の歴史」中央民族学雑誌
- The New Vision 1998a September 16, "Japadhola to elect King", *kampala*.
- 1998b October 26, "Adhola Leader Names Cabinet", *Kampala*.
- Tieng Adhola n.d. "The Constitution of Tieng Adhola (Adhola Union)", Mimeo.
- Twaddle, M. 1993 *Kakungulu and the Creation of Uganda 1868-1928*. Kampala: Fountain Publishers.
- Uganda Development Corporation 米根 Investors Guide ([米根 1976] 44-67頁)
- Vansina, J. 1960 "Recording the Oral History of the Bakuba" *Journal of African Studies*, 1(1).
- Vansina, J. 1961 "De la Tradition Orale" *Essai de Methode Historique*.
- Walusimbi, L. 1996 "The Future of the Minority Languages in Uganda." *Makerere Papers in Languages and Linguistics*. vol.1, No. 3. Kampala: Makerere Institute of Languages and Linguistics.
- Webster, J. B. n.d. "Migration and Settlement of the Interlacustrine Region." (type script) Department of History, Makerere University, Makerere Institute of Social Research.
- Wrightley, C. C. *Crops and Wealth in Uganda*. East African Studies No. 12.
- Whyte, M.A. 1974 "The Ideology of Descent in Bunyole." Ph.D. Diss. University of Washington.
- Whyte, S. R. 1973 "Social Implication of Misfortune in Bunyole." Ph.D. Diss. University of Washington.
- 米根徳洋
- Munro 1915: 148-9 ([The Department of History, Makerere University 1971] 44-67頁)

脚記

本稿のもととなる調査は、日本学術振興会特別研究員に支給される文部省科学研究員特別研究員奨励費の一部を用いて行った。